

カトリック山手教会月報

やまて



編集・発行 カトリック山手教会 広報委員会 〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎ (045) 641-0735 <http://catholicyamate.org/>

第627号 2022年5月15日

聖週間の祭儀

「受難の主日（枝の主日）」ミサ

4月10日（日）11時30分より「受難の主日（枝の主日）」ミサがラファエル梅村昌弘司教主司式により厳かに執り行われました。典礼色はキリストの受難を表す赤、司教の祭服、司祭団のストラ（首から下げる細長い帯状のもの）は赤が使用され、祭壇の聖櫃（せいひつ）も赤い布で覆われました。

「枝の行列と祝福」には①聖堂から離れた場所から枝で飾られた十字架を先頭に、司祭と奉仕者に続いて会衆も枝を手にして聖堂まで行列する形式②聖堂の入口から司祭と奉仕者のみが代表して祭壇まで入堂する形式—がありますが、今年はコロナ禍であるため後者でした。

梅村昌弘司教説教

受難の主日の典礼をもってわたしたちに示されている大切なことのひとつは、「受難と十字架上の死」と「復活」を決して切り離すことができないということです。ひとつの救いの出来事なのです。わたしたち自身がイエスとともに受難と死を経験しなければ「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」とおっしゃったイエスご自身の復活のいのちにあずかることはできません。聖パウロは次のように説明しています。「あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるた

めに洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」（ロマ6：3-4）

信仰者の鑑であるマリアさまのことを思い起こしてみましよう。「イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。」（ヨハネ19：25）わが子の死にゆく姿を目の前で見っていたイエスの母マリア。我が身に代えて守ってあげたい。母親にとって自分が苦しむよりも子どもが苦しむ方が辛いこと。マリアの心はイエス以上に苦しみました。かつてシメオンはマリアに向かって次のように述べています。「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」（ルカ2：35）カタリナ・ラブレがマリアさまから仰せつかって作った不思議のメダイについては皆さんもよくご存知のことと思います。メダイの裏には一本の横木と十字架をいただいた大きなMの字が、そしてその下には二つのみ心が描かれています。茨の冠で囲まれたイエスのみ心と剣で貫かれたマリアのみ心です。イエスが人々の救いのために忍ばれた苦難をマリアは共にされたということが表わされています。「共苦」ということです。

人生には免れられない苦しみや悲しみという現実があります。どんなに健康に気をつけていても大病を患うことはある。どんなに万全を期して備えていたとしても大きな自然災害に見舞われることも

ある。しかし、どんなに苦しくても、どんなに悲しくても目の前の現実から目を逸らしてしまっはいけない。逃げてはならない。きちんと向き合い、受けとめることが必要です。しかし一方で、その厳しい現実には振り回されても打ち負かされてもいけない。エリザベトがマリアに送った賛辞を忘れてはなりません。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は何と幸いなことでしょう」。受難と死の先には復活があるとイエスご自身が弟子たちを前にして予めおっしゃっています。「神殿を壊して三日で建て直してみせる。」

十字架上のイエスと苦しみを共にすることによって復活のよろこびに導かれることを信じましょう。「見なさい。あなたの母です。」マリアはわたしたちの苦しみのそばにも立ってくださる。「原罪なくして宿り給いし聖マリア、御身に依り頼み奉る我等のために祈り給え」。

3月25日の神のお告げの祭日に、教皇様がウクライナとロシアを「聖母マリアの汚れなきみ心」に奉献されたことも納得のいくことです。